

芦原町史

三 上 一 夫

「調和のとれた町づくり」という芦原町の今日的課題をふまえての町史編さん着手してから五カ年余を経て、さきほど刊行されたがその編さんのための陣容は、従来
の県下市町村史に例をみない画期的なものであることが、まず第一に注目される。

小葉田京大名誉教授が顧問となり、印牧

県文化財専門委員が近現代史と全体の総括を担当、地形・地質・地史を三浦福大教授、考古学を澄田名大教授、古代・社寺を重松福大教授、中世史を故井上金大教授、近世史を高沢金大助教授・故武井福大助教授、教育史を関福大教授、地理を齊藤金大教授・吉川福井女子短大長、仏教美術史を野村県文化財専門委員、温泉史を金崎石川県農業短大教授・和座金大教授など斯界の権威者をはじめ県内の研究者多数の協力を得て完成したものに、極めて学問的水準の高いものと言わなければならない。しかもそれぞれの専門的分野の調和と統一をはかり、全体を見事に体系づけ町史編さんのねらいを的確に果している。このさい町当局の格別な財政的な裏付けなど、その真剣な熱意のほどに対しても、全く敬服のほかはない。

ところで町史編さんの基本的な考え方として、まず最初に地域住民の生活の基盤となる自然環境に徹底した探求のメスを入れたのち、先史時代から現代に至る歴史的展開を、地元の豊富な文献等を精一杯駆使し

て克明に敘述している。次いで郷土の地理的諸条件を、「土地と人のつながり」に視点をすえて分析し地域的特質を明らかにし、さらに将来への展望としての町政のビジョンまで描き出している。従って巨視的、かつ実証的な研究視角に立った画期的な町史編さんの在り方を提示した点で、郷土史学界に対して甚だ啓蒙的なものと思考される。

内容について略述すると、第一篇「郷土の自然」では、地形や地質について精密な検討を加えている。つまり北端から西南に続く海岸、その背後の浜坂砂丘・北潟湖、加戸から細呂木に続く広い台地、これらの南に広く広がる坂井平野の竹田川流域についての自然環境の特質を、地質学の立場から鮮やかに説明する。

第二篇「郷土の歴史」では、先史時代の地史・原始・原史時代の検証に当り、今日の考古学の学問的成果を十二分に活用する。さらに古代における条里制の展開はじめ、東大寺領庄園の桑原庄の成立、発展および経営内容を検証し、また神仏信仰の実

態につき、井口神社・春日神社・安楽寺の徹底した調査、検討を試みている。中世では、興福寺兼春日社領の河口庄・坪江庄の構成と支配についての卓抜な史眼による克明な分析は、越前の庄園史の研究に寄与するところも極めて大きい。

このさい、嘉元三年(一三〇五)と応長元年(一三一)の中世古文書にみられる「葦原新田」の語につき、河口庄の預所ないし雑掌が葦原を開拓して新田にすると、給与の増額分に当てられるものと解釈する。そのため現在の葦原の初見が鎌倉後期であるとみることができず、「たまたま現在の町名のついた地域が、無限の可能性を秘めて九頭竜川下流域にひろがっていたということにすぎない。しかしこの葦原の開拓が北陸をして日本海域きつての先進地域とさせた点は銘記さるべきで、葦原という町名は発展する町と説明して憚らないであろう。」(一八〇頁)と甚だ示唆的な興味深い見解をひれきする。さらに地域の仏教関係の文化遺産や各種の文化財の詳細な調査報告を行っている。

近世では、複雑な領地と支配の関係、農政機構や農業経営・農民生活の実態、用水の管理運営、水利の発達と争論、百姓一揆・村方騒動など、豊富な史料や図表により、後期封建社会の成立・発展・崩壊過程を明快に検証する。明治以降の近現代については、芦原・北潟・本荘の三村の成立、泉都芦原の出現、戦後の新芦原町の誕生と発展を中心に、多彩な歴史の変遷の足取りを、リアルな筆致で克明に描き出している。

第三篇「郷土の地理」では、「土地と人のつながり」という視点から、種々の資料、統計図表等を用いて、地理的・社会経済的な諸条件を分析、検討する。

第四篇「郷土の将来」では、今後の町政のビジョンを中心に、国の坂井北部丘陵地総合開拓建設事業や県の総合振興計画に果たす重要な役割につき、短期・長期の両観点から町政の未来の青写真を明示する。

戦後どしどし刊行された市町村史の編さんに当り、とかく疎漏になりがちで、また難点とされるところが、地域住民の生活の基盤となる自然環境についての精密な探索

や先史時代の科学的解明、さらには将来への具体的な展望であったが、芦原町史においては、このような問題を徹底的に究明し、学問的な追及を試みており、既刊の郷土史のなかに断然精彩を放つものとして高く評価されるべきであろう。